

## 木原氏についての私感

この程、木原氏の歴史を収集しての途中の私感として文章をまとめてみようと思います。

木原氏は、鈴木氏として徳川家康に取り立てられてから木原氏と、改名しなんとかして一族を盛り立てようとしていたことがわかります。

いわゆる義民六人衆ですが、入新井町誌を見ると、用人の公金横領によって引き起こされた風になっています。また、町誌では義弘は逮捕された6人を直接取り調べています(都営調べは計2回)。殿様(重弘)は、幕府のお狩場であるので支出はしょうがないと論じたり、やさしく接していたのですが、6人の頑なさに切れて席を立ててしまいます。その後即処刑となったのですが、ここで不自然なことが、6人の遺骸引き取りの命令は前日に出されていました。このことは、町誌でも指摘されています。そして、取り調べに当たった役人は3人、その3人が、その後、不自然な死を迎えます。しかし、殿様には外は及んでいない様子。殿様が悪く言われているのですが、殿様は公金横領は知らなかったのではないか、また、殿様が切れてしまうように仕向けたのではないか、そのように思います。(時代劇みたいな展開ですが・・・)その後、木原屋敷にも祟りがあったことから、大迫弔会をして霊をともらったといい、年貢の軽減をしたといいます。ちょっと伝え聞いているお話とはちがいます。また、義民は6人ですが、そのうち1人の妻子3人が後追いの焼身自殺をしています。

この重弘の時代から木原家は、単に大工頭や普請方から江戸城で彼の周りのものが〜の間御番とか、御小納戸役、御近習番となっています。重弘自身は重要な普請方の職をえるために放ったと考えられます。いかに彼の政治力があつたかを示しています。

安政5年の記述では、日照が「御番入りし、小姓組酒井対馬守組となる」とあります。明治維新直前の記述です。この小姓組とは、ウッキペディアには、

徳川将軍の馬廻衆(親衛隊)としての高い格式を持ち、同様の書院番と共に両番と称された。五番方(書院番、小姓組、大番、小十人、新番)に数えられる軍事部門の職制であり、大番、小十人、新番よりも上に置かれた。小姓組の番士には幕府内での出世の道が開かれていた。小姓組はその中でも両番(小姓組、書院番)に含まれている。一般的にイメージされる「小姓」とは異なり、純然たる戦闘部隊である。戦時の任務は旗本部隊に於いて将軍らの本陣備内にある騎馬隊の任に就き、平時は当初、江戸城内の将軍警護として本丸御殿黒書院西湖の間(この前に花畑があつた)に勤番していたが、寛永20年(1643年)の新番創設に伴い、書院番が勤番していた白書院紅葉の間に移動している。なお小姓組は備である書院番と異なり、駿府在番はない<sup>[1]</sup>。書院番とともに親衛隊的性格を持つため、番士になる資格が家格や親の役職などで制限されていた。そのため番士の格が他の番方より高いとみられ、その後も高い役職に就くことが多かつた。若年寄支配で、番頭の役高4,000石。6番あり、番頭の他に与頭1人と番士50人。西の丸に他に4番あつた。

とあります。

名古屋での手柄で武将入りした一族としては、徳川の最後において戦闘部隊に配属されたことは、良かったのではないかと思います。梅木氏のおじいさんの話に出てきたサーベルが良くないので、日本刀をサーベルに仕立て直したといった話には真実味があります。

話が前後してしまいますが、～の間御番というのは、部屋ごとの書簡のやり取りまた、調整役、警護の任に当たっていました。

入新井町誌に「木原清」という名前がでてきます。これは木原白照の長男で後に善慶寺にある碑石を建立した一人です。陸軍中将まで行ったひとで、梅木さんのおじいさんの話とはこの人ではないでしょうか。

とりあえず中間の私感です。